

要旨

ピエ・ノワールのマンガ作家フェランデズによるアルジェリア表象 —『オリエント画帖』に見る複眼的視点—

青柳 悦子

フランス人マンガ作家ジャック・フェランデズはフランス植民地下のアルジェリアに生まれた、いわゆる「ピエ・ノワール」である。フランスでは、アルジェリアの独立によって生じた100万人もの本土への引揚者がこの名で呼ばれてきたが、近年アルジェリアに関する歴史が公的に見直され、彼らの自尊心や記憶に対する社会的承認が進むとともに「記憶の戦争」と呼ばれる事態が出現した。もともとピエ・ノワールは多様な人々からなっているが、この動きの中で、過去に固執し利己的な主張を展開する人々というイメージがピエ・ノワールに付与されることにもなった。本論文では、植民地期のアルジェリアを描いたフェランデズの代表作『オリエント画帖』(10巻、1987-2009)をとりあげ、この作品が備えている植民者と被植民者を同時にまなざす複眼的な視点に注目する。さらに、このマンガ作家が受けてきた非難とは逆に、彼がピエ・ノワールの主流とされるあり方とは距離をとり、相対主義的な立場に立って歴史を真摯に掘り起こそうとする貴重な存在であることを示す。

Abstract

Pieds-Noirs Cartoonist Jacques Ferrandez and His Representation of Algeria: Pluralist Vision in the *Notebooks of the Orient*

Etsuko AOYAGI

French cartoonist Jacques Ferrandez was born in Algeria under the French rule. He is one of Pieds-Noirs, i.e. 1 million people who repatriated from Algeria to mainland France before and after Algerian independence. Recently, Pieds-Noirs activists' historical view has gained wider recognition in France, leading to a "war of memories." In this context, it is common to imagine Pieds-Noirs as a unitary group of egotistic advocates embracing strong nostalgia to their past. This paper will focus on Ferrandez's *Notebooks of the Orient* (original title: *Carnets d'Orient*, 10 vols., 1987-2009), a panorama of French occupied Algeria, in order to clarify the author's pluralist vision, which is opposite to the so-called main trend of Pieds-Noirs. Furthermore, the graphic novelist will be regarded, contrary to harsh criticism against him, as an alternative model of younger generation of Pieds-Noirs who can have an impartial view about the historical reality while being affectively and intellectually committed in the matter.

ピエ・ノワールのマンガ作家フェランデズによるアルジェリア表象

— 『オリエント画帖』に見る複眼的視点—

青柳 悦子

1. はじめに¹

フランスによるアルジェリアの植民地支配は、1830年から133年間におよんだその期間の長さからもまた本国との密接な関係の点からも、世界における近代の帝国主義を考える上できわめて重要な事例となっている。また1962年のアルジェリア独立によって発生した大量の「引揚者」は本国の人々から「ピエ・ノワール」と称され、蔑視を浴びながらフランス社会へ統合していったが、彼らは植民地支配側に関するポストコロニアル研究の対象としても貴重な存在である。このピエ・ノワールが近年フランスで改めて社会的な認知を得るようになり、それとともに「記憶の戦争」と呼ばれる事態が出現した。こうした経緯からピエ・ノワールをめぐる学術研究が現在フランス内外で活発化している。同時に、ピエ・ノワール像が偏ったかたちで固定され、このことが植民地時代のアルジェリアとそこに生きた人々の実情に対する注意深い理解をむしろ妨げる事態をも生んでいることが懸念される。

本論文はピエ・ノワールの当事者であるフランス人マンガ家²ジャック・フェランデズ Jacques Ferrandez (1955-) とアルジェリアに関する彼の仕事、とくに代表作である『オリエント画帖』を取り上げることで、ピエ・ノワールに対する一面的な理解を修正するとともに、彼の創作作業を貫く複眼的な視点を評価するものである。大多数の住民に対する差別と抑圧によって成り立っていたアルジェリアの植民地支配が否定されるべきものであったことは自明である。その自覚の上で、植民地支配という現実を支配者側の人間として生きた人々について冷静な視線を向け、この過去の全体と向き合おうとするフェランデズの姿勢がもつ今日的な意義を探りたい。

2. 植民地アルジェリアにおける「フランス人」

「ピエ・ノワール」(Pied-noirあるいは複数形で Pieds-noirs、「黒い足」の意)とは、広くはフランス植民地支配下にあったマグレブの地(現在のチュニジア、アルジェ

リア、モロッコ)に居住していたヨーロッパ系住民を指す言葉である。この言葉が頻繁に使われ始めたのは、アルジェリアで独立戦争が勃発しフランスにとって大きな政治・社会問題となってきた1950年代半ばからであると言われ、とりわけ1962年3月のアルジェリア独立の決定に伴って生じた最終的に100万人におよぶ本土への「引揚者」を本土のフランス人が名指す言葉として一般化した。元「入植者」であったピエ・ノワールと呼ばれる人々についての理解を深めるために、まず植民地アルジェリアにおける彼らの歴史について簡単に確認したい。

1830年7月にフランスによるアルジェリアの統治が開始されると、フランスは支配地域の拡大を試みる一方で入植を奨励する。占領地域で没収した土地・財産を分け与えるかたちで入植が拡大されるとともに、アルジェやオランなどの都市には本国から莫大な資本が投下されて都市が整備され発展していく。軍事的制圧がひとまず完了した1848年にはアルジェ、オラン、コンスタンチヌの3県が設置され、また1871年からはアルジェリアは内務省の管轄とされる。すなわち、アルジェリアは——「総督府」のおかれる植民地でありつつ——フランス国内の一地方の扱いとなった。

独立時にはアルジェリア全土の人口は約1100万人強、そのうちのおよそ1割が「フランス人」と通称されるヨーロッパ系住民であった。だが「コロン(入植者)」とも呼ばれる彼らは、こうした呼称とは食い違う面をもった人々だった。

まず出自の多様性である。入植開始の当初はフランスからの移住者よりもスペイン、イタリア、マルタなどからの移住者の方が上回ったほどで、フランス以外を出身地とする住民は19世紀半ばにヨーロッパ系人口の4割、1881年には半数に迫った³。しかし彼らをフランス市民として取り込むための法律が19世紀後半に制定され⁴、ヨーロッパ系の住民には容易に市民権が付与されることになった。こうして「フランス人」が飛躍的に増加したが、彼らの中にはフランス語を話さないか不得意な人々や、フランスとはなじみのない人も少なくなかった。

また何世代にもわたるアルジェリアの地への帰属がある。19世紀後半まではヨーロッパ系人口の増加は新規流入者によるものであったが、その比率は次第に下がり、転出者数も減って定住化が進む。1896年には新たに移住してくるヨーロッパ系住民よりも現地生まれの2世の方が数の上で上回るようになる⁵。すなわち、最初の入植者の出身地とはとうに疎遠となり、アルジェリアを自分の帰属場所と考える人々が増えてきたのである⁶。19世紀末以降1962年の独立時までを通して、ヨーロッパ系住民の80%がアルジェリア生まれであった⁷。独立時には多くの家族が4世代かそれ以上にもわたるアルジェリア居住歴をもっていた。

職業や社会階層の多様性もある。入植者という言葉から一般にイメージされる大

農場主あるいは裕福な企業経営者は実はわずかであり、多くのヨーロッパ系住民は下級の公務員や大小の会社の被雇用者、商店主、農場・工場の労働者などであった。むろん思想や信条も、いかなる国においてと同様、さまざまであった。

すなわち「アルジェリアのフランス人」とはきわめて多様な人々についての総称であり、ムスリム住民とは異なる立場にあるという点（非常に重要な共通点ではあるが）以外には共通点を見出すことがむずかしいような不均質な集合体であった。

しかし彼らは独立戦争の激化そしてアルジェリアの独立決定によって、共通の運命を担うことになる。民族解放戦線（FLN）によるアルジェリア共和国暫定政権とフランス政府との間で、1962年3月18日にエヴィアン協定が締結されて独立が承認された前後から7月3日の独立達成をはさんだ数カ月間に、多くのヨーロッパ住民が、ほとんどの財産を置いてフランス本国へと移住した。これが「大脱出 exode」と呼ばれる悲劇的な事態である。

3. 「ピエ・ノワール」と「記憶の戦争」

引揚者⁸たちは公文書では「祖国帰還者 Rapatriés」と呼ばれた⁹が、彼らの中にはフランスを「祖国」とは程遠い、見知らぬ土地と感じていた者も少なからずいたことはすでに述べた経緯から明らかであろう。一方フランス本土の人々からすれば、アルジェリアからの引揚者たちは社会のお荷物であり、植民地支配というフランスの汚点を象徴する存在であった。彼らの代表的なイメージは、植民地制度に乗じて利権をほしいままにし、「原住民」を差別的に虐げてきた裕福で強欲な人々、極右テロ組織 OAS¹⁰ に象徴される暴力的な利己的集団である。さらにここに、着の身着のままで引揚げてきたみじめな人々というイメージが加わる。「ピエ・ノワール」という蔑視や嫌悪を含んだ名で呼ばれ疎外感を抱えながら、引揚者たちの多くは南フランスの各地あるいはパリに散っていく¹¹。1960年代の好景気の中で彼らの再就職問題は表向きに解消されたとみなされ¹²、「引揚者」の存在自体が——当事者たちの意識とは別に——社会の前面から早急に消え去っていくこととなった。同時に政府は植民地支配の過去に触れることをタブーとすることで国民全体の統合を図る「忘却政策」をとってきた¹³。

こうした事態を一変させたのが、今世紀への転換期に制定された二つの法律である¹⁴。1999年10月、それまで国内紛争とされてきた1954年から62年までのアルジェリアでの武力衝突を正式に国家間レベルの「戦争」として認める法律が成立する（通称「アルジェリア戦争法」¹⁵）。さらに2005年2月には、植民地からの引揚者の苦難を公式に認める法律（通称「引揚者法」¹⁶）が成立する。ともにピエ・ノ

ワール諸団体からの長年にわたる強い働きかけの成果として制定されたものである。「戦争法」によって、この闘いに動員されたすべての兵士の貢献や犠牲が称えられ、さらに一般住民の犠牲が記念されることとなった¹⁷。「引揚者法」では植民地時代の入植者の「肯定的業績は公に認められる」（第1条）と宣言され、引揚者の名誉回復と彼らの営為に対する「感謝」の表明が公式に定められた。

かくして歴史をめぐる公的見解が変更されるとともに、「歴史」観をめぐる議論が沸騰することとなった¹⁸。それはピエ・ノワールの個人ないしは集団の経験にもとづく「記憶」を社会がいかにか承認するかという問題であると同時に、異なる立場の間での記憶をめぐる対立という現象でもある。これが「記憶の戦争」と呼ばれる事態である¹⁹。むろんアルジェリア側とフランス側の歴史観の激しい対立もある。

ここでピエ・ノワールたちの動向について簡略にふり返っておきたい。引揚当初は失った財産の補償などの権利要求運動が、また少し経ってからはさまざまな親睦行事をおこなって苦労と思い出を共有する動きが目立った。こうした活動の中で、「ピエ・ノワール」という用語は本土の人々が差別的な感情を込めて用いる他称から、次第に、帰還者自身が自己のアイデンティティを確認しながら用いる自称としての側面を持ち始めたのである²⁰。かくしてピエ・ノワールの人々が自分たちを一つの「コミュニティ」として積極的に打ち出す傾向が高まっていく。

その最も代表的なものともみなされているのが、「セルクル・アルジェリアニスト Cercle Algérieniste」²¹という団体である。1972年創立のこの組織は黒い足をイラストに取り入れたシンボルマークを用い、誇りを込めて「ピエ・ノワール」を自称として掲げている。設立目的として「アルジェリアのフランス人たちの歴史と記憶を救い出し、擁護し、伝達する」ことを謳い、2018年現在39支部をフランス全国に展開し、自分たちの「記憶」の掘り起こしと発信を積極的におこなってきた。

セルクル・アルジェリアニストはこれまでフランスのナショナル・ヒストリーにおいて公式には「忘却」にさらされてきた自分たちの過去を救い出し、その記憶を広く国民に伝えていくことを目的として活動している。その意味でこの団体が、社会的に定着した公的な歴史観に揺さぶりをかける革新的な側面をもっていることは確かである。だがその一方で彼らの主張の偏りも顕著で、ノスタルジーに浸るだけでなく過去の植民地社会を極端に理想化するとともに²²、自分たちにとって不愉快な発言や不都合な事実の提示を前にしてしばしば激しい攻撃を展開してきた²³。西欧社会研究を専門とする米国の研究者コーエンが詳細に論じているように²⁴、セルクル・アルジェリアニストやそれに類するピエ・ノワールの諸団体は、積極的に政治的ロビー活動を展開して、地方自治体や政府に対して、アルジェリア植民地支配を顕揚する施設の設置や公式行事を要求してきた。それが結実したのがさきに掲げ

た二つの法律である。またこの種のピエ・ノワール諸団体は、30年ほど前から極右政党「国民戦線」(2018年6月「国民連合」に改称)²⁵と密接な関係にあり、フランス国内外の人々がピエ・ノワールに対して、極端な政治的傾向を持つ自己中心的な人々というイメージをもつことにつながっている。

ここで注意しなくてはならないのは、「ピエ・ノワール共同体」という引揚者全員を含むような一枚岩の人間集団が存在するわけではないということである。もともと植民地時代の「アルジェリアのフランス人」は多様なルーツをもち、社会的・経済的立場のうえでもさまざまな人々からなっていた。引揚者たちの境遇も考え方も実に多様である。「祖国帰還者」という言葉を、フランスは自分の「祖国」ではないという意識から拒否する人もいれば、逆にアルジェリアは元々フランス国内であったので移住にあたってあえて「祖国帰還」と呼ぶのはおかしいと考える人もいる²⁶。一方でこの言葉にとくに違和感を抱かない人も存在するだろうし、ピエ・ノワールどうして団体活動をおこなうことを好む人も好まない人もおり、まためざす活動の方向も多様である。

ピエ・ノワールの多様性を示す事例として、ピエ・ノワールたちを中心としながら、植民地支配への批判的意識に立ち、未来志向の運動を展開している団体「太陽の力 Coup de soleil」を紹介したい。1985年に設立されたこの組織は、「西地中海地域の諸民族の間の絆を強める」ために、国籍や、アラブ＝ベルベル人・ユダヤ人・ヨーロッパ人という民族＝文化的な区分を問わず、また移民も含めて、フランスとマグレブ地域の文化的交流を平等主義に立って模索しようとする団体である。本部をパリに置き、フランス南部を中心に9つの拠点を形成しているが、そうした支部の一つがおこなっている文学賞²⁷では、作者の出自や作品の内容においてマグレブ地域に関わる文学作品を広範に対象とし、すぐれた作品を選定して普及に努めている。これまで、マグレブ各国の作家たちやこの地域を題材にとった移民・フランス人(引揚者を含む)の作品が受賞しているが、当然、フランスの帝国主義への糾弾を含む作品もある。この団体は主流とされがちなピエ・ノワール諸団体とは異なって、過去の反省に立ち、植民地支配という消去できない歴史的経緯の結果として生まれてきたこの地域の多文化的交流を、発展的に広げていこうとしている。

記憶をめぐる社会的研究の第一人者であるドイツのアライダ・アスマンは、矛盾しあう複数の記憶が対峙し、それぞれが「社会的承認を求めて自らの権利を要求」することを当然とみなし、それが今日の文化の活性化を生む駆動力となっていると考えている²⁸。私たちが記憶の継承と更新をめぐる戦いを前にして学ぶべきは、まずもって、歴史や記憶を複数的なものとしてみなす姿勢であり、たえず掘り起こすべき事実や経験へと真摯に目を向ける態度であろう。

4. ピエ・ノワールのマンガ家ジャック・フェランデズ

1955年にアルジェリアで生まれたフランス人マンガ家ジャック・フェランデズは、ピエ・ノワールの最も若い世代の代表者であると言える。フェランデズがまさに「記憶の戦争」のただ中に身を置いてどのように創作活動をおこなっているのか、また彼に対するどのような評価に直面しながらピエ・ノワールであることから養われた視点をもとに問題提起をおこなっているのかを以下に検討したい。

まず彼の略歴を見ておこう。生後3カ月のときに家族とともにアルジェから南仏に移住したフェランデズはニースの国立装飾芸術学院で学び、卒業後マンガ作家・イラストレーターとしての活動を始め、現在までに40冊以上の作品を刊行している。デビュー作は1980年に作画を担当して出版した探偵ものであった。このシリーズのヒットののち南仏を舞台に地方生活を描く作品などを発表した後で、1987年から20年以上かけて、フランス領アルジェリアを描く歴史絵巻となる『オリエント画帖』(*Carnets d'Orient*, 10巻、1987-2009)を完結させる。徹底した歴史的考証作業の上に立って、フランス人植民者の家系を軸に130年におよぶ植民地期アルジェリアの様相を浮かび上がらせたこの大作は、権威ある歴史雑誌の賞ほか数々の賞をもたらすとともに²⁹、フェランデズの創作人生に決定的な方向性を与えた。

フェランデズはほかにも様々なかたちでアルジェリアに関連した作品を手掛けていく。まずアルジェリア人作家ラシード・ミムニ Rachid Mimouni (1945-1995)³⁰の文に水彩の挿絵48点を添えた画文集『訪ねられた丘』(*La Colline visitée*, 1993)が出された。アルジェの丘に広がる旧市街カスバを主題にしたこの書籍をミムニと共作するために、1993年——アルジェリア内戦状態の真ただ中の時期——に、フェランデズは初めてアルジェリアを訪れた。その後、内戦が終結すると2003年以降頻繁にフェランデズはアルジェを訪れるようになる。さきの画文集の絵も部分的に用いながら、こうしたアルジェ訪問の折の随想やそこから生まれた思索を交えて作られたのが紀行随筆画集『アルジェへの帰還』(*Retours à Alger*, 2006)である。さらに『オリエント画帖』を完結すると、かねてから愛読していたアルベール・カミュ Albert Camus (1913-1960)の作品の中から、アルジェリア問題をめぐるカミュ文学の「核心をなす」³¹とフェランデズが考える短編「客」をマンガ化して発表する(*L'Hôte*, 2009)。アルジェリアの内陸の半砂漠地帯を舞台に、小学校に一人住むフランス人教師の孤独と煩悶を描いた作品である。次にカミュ翻案の第二作として20世紀文学の最高傑作と称される『異邦人』を、1930年代後半のアルジェという時代状況の中に据えてマンガに翻案して発表する(*L'Étranger*, 2013)。さらにカミュの未完の遺稿小説『最初の人間』を大胆な着想も交えて一つの完結した作品とし

てマンガ化する (*Le Premier homme*, 2017)。ほかに植民地支配終結直前のアルジェを舞台にしたモーリス・アッティア Maurice Attia (1949-) の犯罪小説『ブラック・アルジェ』(2006) のマンガ化 (*Alger la Noire*, 2012) もおこなっている。

なお『最初の人間』の出版に合わせて、自作についての解説を含むエッセイ『わが二つの岸辺の間で』(*Entre mes deux rives*, 2017) が刊行された。この著書やその他の情報をもとに、フェランデズとアルジェリアとの関係について、彼の家族の歴史をたどって見ておきたい。

フェランデズという姓はスペイン語圏のものである。スペインのヴァレンシア地方生まれで、帆船の見習い水夫であった父方の曾祖父が 19 世紀後半にアルジェに移住してきたのがこの地での一家の始まりである。港近くでヤミのタバコ売りなどをしたあと小さな食堂を構えたいが、二人の子供と共に 1905 年にフランス市民権を獲得している。第三子としてこの地で生まれたジャックの祖父は、アルジェの庶民街であるベルクール地区のリヨン通り 96 番地すなわちカミュが育った住居の斜め前に靴屋を開いた。ジャックの父はここで 1918 年に生まれ、まさにカミュと同様に家族の中で初めて勉学を積み³²、医学部に進学する。第二次大戦に動員されたあと医学の道に戻り、1950 年頃、地元で総合医として働き始める。

母方の家系もアルジェリアと関係が深かった。鉄道に勤務していた曾祖父はオラン南方のベニ・ウニフの駅長に任命され、南仏から妻子を連れて移り住んだ。『オリент画帖』の第 3 巻で描かれるベニ・ウニフの駅長家族のモデルである。母方の祖父は、同作で描かれる息子たちと同様、第一次大戦に応召する。終戦後彼はフランスでエンジニアの教育を受け、結婚してフランスで生活する。その妻は、仏北東部アルザスに起源を持ちアルジェリアのモスタガネミに根づいていた家族の出で、夫妻はしばしばアルジェリアを訪れていた。その娘であるジャックの母親はパリっ子であるが、こうした家庭環境から、ジャックの父と出会ったのであろうか。

1955 年 5 月、祖父母を中心に親族で営んでいた靴屋にナイフを持ったアラブ人が侵入し、おじが大けがを負い、フランス人従業員が死亡するという襲撃事件が起きた。ベルクール地区で医者をしていた父はアラブ人たちの動きや覚悟を敏感に感じていたようである。12 月にジャックが生まれ、生後 3 カ月になるのを待って、家族は縁故もいないニースに移住し、父は病院を開業する。

こうした経緯から窺われることは、フェランデズの家系は父方・母方ともに 4 世代前にまで遡るアルジェリア入植の歴史を持つが、とくに父方はいわゆる「プチ・ブラン」と呼ばれる庶民の家系であったこと、植民地経営をおこなう行政側の権威とはとりあえず縁がなかったことである。また、本土への移住は、独立戦争の初期に自発的に決断されたものであるため「大脱出」の混乱は経験していない。父は引

揚者政策とは関係なく、医師という専門職を生かしてフランス社会への同化を果たすことができた。ほかのピエ・ノワールに比べれば、アルジェリア独立という事態に対する怨恨や被害者意識はそれほど強くない家庭であったと推察される。

物心つく前にフランスに移住したジャック自身には、フランス領アルジェリアでの記憶はない。逆にアルジェリア国の成立時に6歳であったジャックにとって、幼い頃からアルジェリアとはアラブ人たちの国家である。アルジェを訪れ、アラブ人たちの昔からの生活空間としてカスバの街並みを丹念に描いたフェランデズのまなざしにも、本来ここはフランス領であったのといった惜念や、アルジェの中のアラブ的な要素に対する嫌悪はまったく感じられない。また、植民地支配の当事者であった経験もないためか、フランスのこの歴史的汚点に関する身を切るような罪責感や苦渋の思いも彼は免れている。『アルジェへの帰還』で叙述されているように、フェランデズは多くのアルジェリア人と交流し、現代人どうしとして彼らと意見を交わし、若い世代の苦悩や1990年代の熾烈な内戦を含めたアルジェリア社会の現在の問題にも関心を向けている³³。そして同時に、かつてこの地に居住しその後本土に「帰還」した人々の人生についても意識を向けているのである。

フェランデズの特徴として、アルジェリアが現在のアルジェリア人たちのものであることを肯定したうえで、自分の生地であり家族が長らく暮らしてきたこの土地に対する愛着と冷静なまなざしとを同時に注ぐ姿勢を指摘することができる。

5. 『オリエント画帖』におけるフェランデズの複眼的な視点

『オリエント画帖』は、植民地支配が開始された1830年代から独立戦争勃発の前夜までの約120年間を数十年間隔で描く第1巻から第5巻まで（以下、第Ⅰ部とする）と、独立闘争の7年間を描く第6巻から第10巻まで（以下、第Ⅱ部とする）に大きく2分される³⁴。第Ⅰ部では、第1巻の主人公である画家ジョゼフ・コンスタン（ドラクロワ³⁵をモデルの一人とする）が遺した絵画を全体のつなぎの糸とし、第2巻以降で、ある入植者一族の4世代の物語が展開される。この第Ⅰ部はまさに絵で見るフランス植民地の展開といった側面をもち、フェランデズは多くの歴史的資料に当たりながら背景や状況を克明に描出している³⁶。第Ⅱ部では、さきの一族の者も含めたヨーロッパ系住民だけでなく独立闘争を展開するムスリム住民の側の物語もたどられ、その交錯点にとりわけ第7巻から最終巻までの中心人物であるアラブ人の女子医学生サミアが配される。

この作品の最大の特徴はフランス領アルジェリアという一つの歴史的状況を相対的な見地から描き出すことである。筋の中心となるのは植民者側の人々であるが、

支配される現地民側の事情や彼らの視点が交えられ、政府や入植者たちが当時しばしば強調し、さらには引揚後に多くのピエ・ノワールが反復してきた、諸民族が融和的に共存する理想的社会というイメージがずらされる。アルジェリアを「オリエント」とみなすことやそれにまつわる幻想を含め、実際に存在していたフランス人側の偏見があえて描出され、批判的な距離をもってアイロニカルに提示される。他方、ムスリム現地民側の残虐行為³⁷も、それが存在した以上は、作品にとりこまれている。フランス側とアルジェリア現地民側、どちらにせよ、どちらか一方を美化し、正当化したいと欲する者は、この作品の多くの箇所にも不満を覚え、居心地の悪い思いをするであろう。

フェランデズの複眼的な視点は、人物像やストーリー内容、コマの描き方、歴史的資料の間接的・直接的な利用の仕方など多面にわたって駆使されている。

この作品の内容や技法を精緻に分析したノネンマッシャーが論じている通り³⁸、フェランデズが描く登場人物たちは、とりわけ分裂意識と苦悩を抱え、自己批判的精神を持った——あるいは持たざるをえなかった——人々である。たとえば、この作品が描く家系の元祖となる第2巻のヴィクトールは、1870年のパリコミューンの蜂起に参加し敗北した民衆革命の士で、新天地をアルジェリアに求めて移住するが、荒れ地で炭焼きをして苦労したのち、反乱を企てた住民からフランスが巻き上げた土地を与えられて農場を経営するまでに至る。そして結局ムスリム住民からの焼き打ちに遭ってしまう。1930年のアルジェリア支配100年祭を背景とする第4巻では、ジャーナリストとしてパリから戻ったポール（ヴィクトールの孫にあたる）が、裕福な大農場主となった兄の醜悪なふるまいや、フランス植民地支配の数々の耐えがたい欺瞞に直面する。そもそも第1巻の主人公である画家コンスタンは、アラブ人女性への恋に落ちてアラビア語を習得し、彼女の跡を追う過程で仏軍にも、またアブデルカーデル³⁹の軍にも協力した人物として描かれていた⁴⁰。その裏返しであるかのように第II部の主人公となるサミアは、アルジェリア南部出身のアラブ人で、フランスの教育制度の中で勉学を積んだ現代的な女性であり、激化するアルジェリア紛争の平定を任務とする仏将校オクターヴ（ポールの実の息子）と恋愛関係にあるが、独立戦争の闘士である兄を通じて民族解放運動とも関わりをもつ。サミアとの愛を貫くオクターヴはフランス側の腐敗に直面して職を去るが、最後まで軍と自分の出自に翻弄され続ける。

作品にはフレスコ画のごとく多様な人々が登場するが、主要な登場人物以外にも、現地民の服装をして現地社会になじんでいるイタリア系のプッツォ（第1巻でコンスタンを迎える人物）、男装をしてアルジェリア各地を旅する女性ジャーナリスト⁴¹（第3巻）ほか、フランス軍から脱走してアラブ側についた兵士（第1巻）や軍隊

を退いたのち現地民の部落に隠遁する大尉（第2、4巻）、フランス軍・民族解放軍双方からの暴力に遭い結局仏軍に従うムスリムの少年（第5-10巻）など、二つの陣営の両方に関わりながら生きる人間たちが多く描かれている。

描画の画面もしばしば両価的で、ヨーロッパ人たちはそれを見つめるアラブ人たちの冷やかなまなざしとともに描かれる。当時のフランス人たちの視線や認識は、絵葉書や写真、新聞記事などを作品のページ上に再現的に取りこむことによって、今日の意識から見れば顕著な植民地主義的イデオロギーを帯びたものとして提示され、読者の批判的な意識を目覚めさせる⁴²。

6. フェランデズによるピエ・ノワールの多様性の顕示

『オリент画帖』の詳細な分析は別の機会にゆずることとして、本論文では、フェランデズのこのシリーズがフランス領アルジェリアという必然的に軋轢と交流をはらんだ多元的な社会をその史的展開を含めて浮かび上がらせると同時に、現代のピエ・ノワールの多様性そのものを明示する機能をもった作品であったことに関心を向けたい。

まず学術界の一部においてフェランデズに対する激しい攻撃が積み重ねられていることを見ておこう。「記憶の戦争」が顕在化し、それとともに歴史学や社会学など広く人文学の領域においてピエ・ノワールに対する関心が高まったことに呼応するように、ピエ・ノワールの一人であるフェランデズが植民地期のアルジェリアを題材として創作した『オリент画帖』が学術雑誌でも議論されるようになってきたのだが、きわめて否定的な見解も一つの流れをなしている。

帝国主義の研究を専門とする米国のマッキニーは2001年に、このシリーズのうちそれまで刊行されていた第I部を論じて、マンガというものがいかに現代において「オリエンタリズム」絵画の美学を回帰させる場となるか、そしてフランスの植民地支配を賛美し記念するピエ・ノワールの記憶に足場を提供するものとなるかを論じた⁴³。マッキニーは植民地支配に対する批判的視点がフェランデズにないわけではないことは認めつつ、彼を「ピエ・ノワール共同体に自己同一化」した存在であると、そうである以上彼は「入植者コミュニティの系譜的連続性」の創出者で、植民地主義を肯定する立場にあるとする⁴⁴。よってフェランデズにはアルジェリア戦争の歴史的現実をきちんとまなざすことは不可能だとマッキニーは結論する⁴⁵。

こうした非難は例外ではない。植民地期アルジェリア文学および共同体意識を専門とする英国の若手研究者スティルは、フェランデズを端的に植民地主義イデオロギーの擁護者であるとみなす⁴⁶。『オリент画帖』の水彩画を用いた芸術的な表

現はフランスのアルジェリア支配を美的に「正当化」するものであり、作品は随所で、不可能になってしまった支配の存続を夢見る「イデオロギー的なファンタジー」を肯定しているとされる⁴⁷。例として、第2巻の農場を焼き打ちされたヴィクトールの物語は、ピエ・ノワールたちが経験しなくてはならなかった植民地支配の夢の「幻滅」を美しく形象化したものにほかならぬと解釈される。フェランデズの作品は「失われた好機へのノスタルジー」⁴⁸の表現にほかならず、これと同じ姿勢をノンフィクションによって表現したのが『訪ねられた丘』や『アルジェへの帰還』であり、本来自分のものであった土地への回帰と、「自分の祖先たちとのつながり」の確認がこの旅の目的であると論じている⁴⁹。

スティルは、マリアヌ・ハーシュの著作以来有名になった「ポスト・メモリー」という概念⁵⁰をフェランデズに適用する⁵¹。ホロコーストに代表されるユダヤ人の壮絶な経験を体験者の子供たちなど次の世代がトラウマごと引き継ぎ、その記憶を自分自身のものとして創作などの原動力としていく現象である。ハーシュによれば「ポスト・メモリー」をもつ次世代は、「自分の誕生や意識の形成に先立って存在した語りによって支配」される⁵²。しかしフェランデズにそれは当てはまるであろうか。

すでに前節で『オリент画帖』の主調である相対主義的なスタンスについては検証したが、以下にはフェランデズ自身による立場の説明を見てみたい。

『オリент画帖』でフランス植民地時代というこの巨大な主題を扱い始めた時、何であれ何らかの共同体の代弁者とは決してならないよう私は務めました。

（ピエ・ノワール共同体）というものがあると考えれば、すなわち全員が同じ考えを持ち、同じ行動をし、同じ政治的意見をもつような成員からなる共同体があると考えれば、それは間違っています。〔中略〕この共同体もまた、あらゆる共同体と同様に、多様性をもったものなのです。しかしながらこの歴史は、記憶論争や記憶の戦争とも呼ばれるものを伴いながら、地中海の兩岸においていまだ熱い問題であり続けています。ですから既存のどの陣営にも与しないように注意することが大事だったので。⁵³

ピエ・ノワールであるという自意識に立ちつつ、一方的な主張に固執するピエ・ノワールの動向に対しては批判的な距離をとるフェランデズの姿勢が、ここには強調されている。

アルジェリアの歴史研究の第一人者であるバンジャマン・ストラは、フランス・

アルジェリアの双方で続いてきたアルジェリア戦争に関する意図的な「忘却」と1999年以降の「記憶の戦争」の過激化を踏まえたうえで、21世紀を迎えた今日、植民地時代や独立戦争を直接経験していない世代が台頭してきたことを前向きにとらえている。ストラは、過去に対する直接の責任を背負っていないこの新しい世代こそ、「怨恨」に凝り固まった前の世代とは異なって、歴史をきちんと読みこむことができるのだと期待を託す⁵⁴。すなわちハーシュの「ポスト・メモリー」の概念が提示する旧世代のトラウマの延長とは異なるあり方での過去への注視、過去についての真の「理解」を進める努力を新世代に託しているのである。自分にはアルジェリアでの生活経験がないからノスタルジーはない、とたびたび発言しつつ⁵⁵、アルジェリアへの強い関心を持ち続けるフェランデズは、まさにそうした使命を引き受けたピエ・ノワールの新世代の一人であり、彼の創作活動は、アスマンの述べるように「時代の証人たちの経験的記憶が失われてしまうことをふせぐ」ために、それを「後世の文化的記憶へと移し変え」⁵⁶る、革新性を伴った作業にほかならない。

7. おわりに

フェランデズはみずからの姿勢を説明したさきの引用に続いて、ものごとを立体的に見るためには複眼的な視点が不可欠だと述べている⁵⁷。ここで強調されている複眼的な見方は、彼自身に対しても向けられるものである。自分と自分が帰属するとされる集団との不一致を認識し、そのうえで自分をその集団に内属するものとみなす、こうした徹底した相対主義にもとづいたものとして、フェランデズのピエ・ノワールとしての自己認識はある。

『オリエント画帖』を通じてフェランデズは、アルジェリアに生まれた自分が植民地支配を肯定しない立場に立ちながら、なおここで営まれた生を否定せずに注視することを自己の創作課題として確信したのだと思われる。それはちょうどカミュが、自己肯定が不可能な状況を引き受け（すなわち自分を「異邦人」と認め）、さらにそのうえで生の意味を探り、それを万人に通じる人間的模索として提示しようとしたのと同じ軌跡を描くものである。この課題認識に立つてカミュの文学を再発見し、それを通じて植民地アルジェリアを問い直す作業にその後フェランデズは着手するが、それもまたピエ・ノワールの一部の人々の偏向とピエ・ノワール一般に対する強固な偏見とに対する静かな戦いとして続行されていくのである。

注

- 1 この論文は以下の英語発表・会議論文をもとに発展させたものである。Aoyagi 2018。
- 2 コマ割りされたストーリーマンガはフランス語では「バンド・デシネ」と呼ばれ、この呼称は日本でも普及しつつあるが、本論文ではこのジャンルを指す一般名称として「マンガ」と呼ぶ。
- 3 たとえば以下に詳しい数字が示されている、Kateb 2014, p.83、足立 2016, p.574。入植の進展については工藤 2013, p.91 のグラフおよび付随する説明 (pp.90-94)、ほかに松浦 2009, pp.573-574 も参照。
- 4 ヨーロッパ系住民については、3年の居住を条件にフランス市民権を与える法律が1865年に、また、アルジェリア生まれの者に自動的にフランス市民権を与える法律が1889年に制定される。
- 5 平野 2002, p.186。
- 6 アルジェリアのフランス人たちの意識の変化については以下を参照のこと。足立 2016, pp.575-577。
- 7 *Ibid*, p.571。
- 8 アルジェリアからの引揚者問題については日本でも研究が蓄積されている。足立 2008, 2012, 2016、足立・渋谷 2012、松浦 2006, 2009、松沼 2013 など。
- 9 フランス政府はアルジェリア独立に伴って本土への移住者が多く生じることを予想し、1961年5月に内務省に「引揚担当大臣」Secrétariat d'État aux Rapatriésを設置した。1961年末には臨時住宅の保証や職業斡旋、低利の貸付けや給付金などを定める法律を制定した（「海外領のフランス人の受け入れと再定住化に関する法律」1961年12月26日）。足立 2012, p. 70 参照。
- 10 OAS（「秘密軍事組織 Organisation de l'armée secrète」）はフランス領アルジェリアの維持を掲げて1961年に結成されたフランスの極右テロ組織。ド・ゴールを中心とする政府を敵対視し（大統領暗殺未遂事件が有名）、アルジェリア民族運動の関係者やその支持者たちへの攻撃を繰り返した。とくに独立決定後の数カ月間、過激な殺戮行為を展開する。
- 11 政府の方針により、引揚者たちはできるだけフランス全土に拡散され、集住することなくフランス社会に統合していくことが推奨された。
- 12 1963年4月には「引揚者の問題はおおかた解決され」と報告された。1964年7月には「引揚者担当大臣」を廃止。また1968年には全国平均レベルに達したとして雇用統計からも「引揚者」という項目が削除された。松沼 2013, p.134 参照。
- 13 引揚者問題に関して国民団結を優先した政府の対応については、松沼 2013 (p.134 ほか) 参照。

- 14 二つの法律をめぐるのは、大嶋 2016 および大嶋 2017 の第 3 章 (pp.71-91) に詳しい。
- 15 『『北アフリカにおける活動』を『アルジェリア戦争もしくはチュニジアとモロッコにおける戦闘』という表現に置き換えることに関する法律』(1999 年 10 月 18 日)。
- 16 「フランス人引揚者に対する国民の感謝および支援に関する法律」(2005 年 2 月 23 日)。
- 17 これを受けるようにエッフェル塔にほど近いパリ 7 区のセーヌ河岸に通称「アルジェリア戦争記念碑」が建立され、2002 年 12 月 5 日に退役軍人数百人を招待してシラク大統領による除幕式がおこなわれた。
- 18 たとえば「引揚者法」の第 4 条には学校教育において、特に北アフリカ植民地におけるフランスの存在の「肯定的役割」を教えるべきだという条項が入っていたが、歴史家や市民団体などの激しい抗議の声が上がって 2006 年に削除された。高山 2006、および大嶋 2014, p.18 を参照。
- 19 アルジェリア関連の記憶をめぐる戦いの具体例は、Cohen 2002、および平野 2014, pp.109-117 を参照。
- 20 ピエ・ノワール団体の活動の変遷を 3 段階に分類した Matsuura 2007, pp.49-50 を参照した。
- 21 2009 年時点で約 8000 人の活動会員を擁し、購読者 12000 人 (2007 年) におよぶ機関紙『ラルジェリアニスト』を発刊 (足立 2012, pp.80-81、数字は団体側公表による)。2004 年には機関紙購読者は 1 万人 (足立 2008, p.46) だったとのことなので、近年の会員の高齢化にともない没故者も増加しているが、団体の活動が衰退方向にあるわけではない、ということであろうか。
- 22 Cohen 2002, pp.132sq. では、彼が接した多くのピエ・ノワールたちが、植民地時代のアルジェリアではいかなる民族的軋轢もなく平和裏に共存していたという証言をこぞって繰り返していたことを衝撃的な集団幻想として報告している。
- 23 たとえば、エヴィアン協定が締結された 3 月 19 日を「アルジェリア戦争記念日」とすることへの強力な反対運動。この日付は自分たちにとって「大脱出」へとつながる苦しみの思い出の日でしかないという理由による。高山 2006, p.97 参照。ほかにもたとえば映画『アウトロー』Hors-la-loi (ラシード・ブシャール監督、2010 年公開) に対する激しい上映反対運動。作品冒頭で、フランス軍がムスリム住民を大量虐殺した (犠牲者数 14 万人とも言われる) 1945 年 5 月の「セティフの暴動」が描かれていることが反発を呼び、かつてのアルジェリアにおけるフランスの存在を冒瀆するものだと主張された。
- 24 Cohen 2002, pp.137sq.
- 25 OAS と深い関係を持ち、アルジェリア独立反対と移民排斥を唱え続けるジャン＝マリールベンによって 1972 年に設立された政党である。近年の国民戦線 = 国民連合の躍進は、ピエ・ノワールたちに目立つ自己保身的傾向が仏国民一般に理解される傾向にあることを示しているのかもしれない。

- 26 足立 2008, pp.36-43; 2012, pp.70-73; 2016, pp.583-584 に「祖国帰還者（ラパトリエ）」という語に対する違和感を表明する当事者たちの声が集められている。ほかに、松浦 2009, pp.584-585 参照。
- 27 南仏のラングドック・ルシヨン地方支部が 2005 年からおこなっている「ハートをつかむ太陽の力賞 prix coup de coeur coup de soleil」。読者による人気投票形式ですぐれた作品を選び、普及に努める。
- 28 アスマン 2007, p.29。
- 29 第 4 巻、第 6 巻がそれぞれマンガ賞を受賞したほか、シリーズの全体に対して 2012 年に雑誌『イストリア』の審査員特別賞が与えられた。
- 30 ミムニは小説『部族の誇り』（*L'Honneur de la tribu*, 1989）など、とりわけ独立後のアルジェリア社会の矛盾を直視する作品によって有名な作家。1990 年代に入るとイスラーム過激派から命を狙われ、93 年末にはモロッコに転居せざるを得なくなった。95 年に急性肝炎のために死去。
- 31 Ferrandez 2013, p.50。
- 32 カミュの 5 歳年下にあたるフェランデズの父もまた、カミュと同様に、ベルクール地区からアルジェの最も権威あるリセ・ビュジョーに通っていた（Ferrandez 2013b, p.49）。
- 33 『アルジェへの帰還』では多くのアルジェリア人との出会いが絵と文で記されているほか、90 年代の内戦下を生きる若い女性と青年をそれぞれ主人公とする短いマンガ作品も掲載されている（Ferrandez 2006, pp.31-34, 35-37）。
- 34 各巻のタイトルと刊行年は以下の通り。第 1 巻『ジャミラ』*Djemilah*, 1987、第 2 巻『炎の年』*L'Année de feu*, 1989、第 3 巻『南部の少年』*Le Fils du sud*, 1992、第 4 巻『百年祭』*Le Centenaire*, 1994、第 5 巻『王女の墓地』*Le Cimetière des princesses*, 1995、第 6 巻『姿なき戦争』*La Guerre fantôme*, 2002、第 7 巻『爆弾通り』*Rue de la bombe*, 2004、第 8 巻『ジェベル・アムールの娘』*La Fille du Djebel Amour*, 2005、第 9 巻『最後の住まい』*Dernière demeure*, 2007、第 10 巻『悲運の土地』*Terre fatale*, 2009。第 5 巻と第 6 巻の刊行の間には 7 年間の空白がある。2008 年には第 1-5 巻をまとめた第 1 集、2011 年には第 6-10 巻をまとめた第 2 集が刊行された。ただし版形がやや小さくなったほか、元の各巻の巻頭ないし巻末に付されていた解説や資料が省かれ、新たな序文が置かれている。
- 35 ウジェーヌ・ドラクロワ（Eugène Delacroix, 1798-1863）。1832 年にフランス政府派遣の外交使節団の一員としてモロッコ王国を訪問し 7 カ月滞在したほか、アルジェリアも訪れた。ドラクロワはこの旅行中にペン画や水彩画で文章と共に旅の記録を収めた何冊もの紀行画帖を作成して持ち帰った。北アフリカの経験はその後の画業に強い影響を与え、傑作と称され、また「オリエンタリズム」の典型的な絵画としても有名な『アルジェの女たち』（1834 年）など多くの作品が生み出された。

- 36 フェランデズが描画の際に参照したものとして、フランスの侵攻以前も含め 19 世紀のアルジェリア各地の光景を描出した版画集 (Kara-Ahmed 1984) が指摘されている。アルジェリア人作家アッシア・ジェパールの序文を巻頭に載せ、パリにあるアルジェリア文化センターを版元として出版されたこの版画集は、説明の文章はすべてアラビア語にフランス語を併記するかたちをとる。監修者の構想において現在のアルジェリア人の視点が明確に採用されている刊行物である。
- 37 部族間対立抗争での斬首 (第 1 巻) や、独立戦争中におこなわれた民族解放軍によるムスリム住民に対する制裁 (喫煙した者の鼻のそぎ落としや仏軍への協力が疑われる者の虐殺、第 6 巻) あるいは醜悪な派閥抗争 (第 8 巻) などが描かれている。
- 38 Nonnenmacher 2008, p.103sq.
- 39 アブド・アルカーディル (1808-1883)。宗教的・軍事的指導者として 1830 年から 16 年間に渡ってフランスの侵略に対して抵抗運動を展開した。一時はその支配地域を大きく広げたが、1847 年には敗北した。フランスの捕虜となったが、有能・高潔な人物としてその後も広く、フランス人からも尊敬を集めた。
- 40 『オリエント画帖』に関するインタビュー形式の自作解説 (Buch 2005, pp.41-92) によると、フェランデズは第 1 巻製作の準備のためにフランス国立図書館で文献調査をしている中で、実際にこうした経験をした人物の資料を発見し、コンスタンのモデルの一人として用いたという (*Ibid.*, p.44)。
- 41 実在したイザベル・エベラール (Isabelle Eberhardt, 1877-1904)。ジュネーブ生まれの女性探検家、作家、ジャーナリスト。20 歳でアルジェリアを訪れ、1900 年イスラームに改宗。アラブ人男性に変装して各地を旅行した。スパイともみなされフランス社会からは排除されるが、現地民からは受け入れられ、現在では脱植民地化の先駆的存在とみなされている。砂漠での洪水により 27 歳で溺死。
- 42 たとえば第 4 巻で掲げられるアラブ女性の裸体写真など多くの絵葉書をフェランデズは作品で再現しているが、その典拠として Alloula 1981 が用いられている。この著作はアルジェリア人のアッラが自民族に向けられた偏見に満ちたまなざしを絵葉書を通じて検証したもので、ポストコロニアル研究の先駆的業績として評価されている (1986 年には英語版が米国で刊行)。
- 43 McKinney 2001.
- 44 *Ibid.*, p.43,47.
- 45 *Ibid.*, p.50.
- 46 Still 2017, p.299.
- 47 *Ibid.*, p.295.
- 48 *Ibid.*, p.306.

- 49 Still 2017, pp.300-306.
- 50 Hirsch 2012. 「ポスト・メモリー」の定義については p.5 参照。
- 51 Still 2017, p.295.
- 52 Hirsh 2012, p.5.
- 53 Ferrandez 2017b, pp.205-206.
- 54 Stora 2003, p.95. 大嶋 2014, p.17 参照。
- 55 たとえば 2012 年 3 月 26 日付のネット上のインタビュー記事でも、フェランデズは乳児期に離れたアルジェリアについて「私には思い出もノスタルジーもない」と述べている。またピエ・ノワールについて、「声の大きい人たちが代表者とは限らない」とし、自分としては「いかなる団体にも所属する気はない」と語っている (Ferrandez 2012)。
- 56 アスマン 2007, p.28.
- 57 「ピエ・ノワールの一人であり、とりわけピエ・ノワールの息子である私は、なにかをここから理解したいと欲するならば、それに対して一定の距離をおく義務がありました。「歴史」を改めて辿り直し、また、多様な視点を採ることが必要でした。ものを立体的に見るには両目が必要なのと同じことです」 (Ferrandez 2017b, p.206)。

参考文献

- Alloula, Malek 1981. *Le Harem colonial*, Lyon: Garance
- Aoyagi, Etsuko, 2018. “The War of Memories and Pieds-Noirs Diversity: French Cartoonist Jacques Ferrandez and His Pluralist Vision”, *Proceedings of The II. International Conference of the Asian Federation of Mediterranean Studies Institutes* (December 23th, 2018 at University of Kyoto), pp.145-151
- Attia, Maurice 2006. *Alger la Noire*, Arles: Actes Sud
- Buch, Serge 2005. *Ferrandez, Une Monographie*, Saint-Egrève (France): Mosquito
- Cohen, William B. 2002. “Pied-Noir Memory, History, and the Algerian War”, in Andrea Smith ed., *Europe's Invisible Migrants*, Amsterdam University Press, pp.129-145
- Ferrandez, Jacques 1987-2009. *Carnets d'Orient*, 10 vol., Bruxelles: Casterman (Rééd. *Carnets d'Orient, Premier cycle*, 2008; *Second cycle*, 2011, Bruxelles: Casterman)
- 2006. *Retours à Alger*, Bruxelles: Casterman
- 2009. *L'Hôte, d'après l'œuvre d'Albert Camus, tiré de L'Exil et le Royaume*, Paris: Gallimard
- 2012. HP : nice-matin, « Jacques Ferrandez: "Ça suffit ! La guerre est finie depuis un demi-siècle" » <http://archives.nicematin.com/cagnes-sur-mer/jacques-ferrandez-ca-suffit-la-guerre-est-finie-depuis-un-demi-siecle.826907.html> [インタビュー] (2018 年 12 月 15 日最終確認)

- 2013a. *L'Étranger, d'après l'œuvre d'Albert Camus*, Paris: Gallimard (邦訳、ジャック・フェランデズ『バンド・デシネ 異邦人』青柳悦子訳、彩流社、2018年)
- 2013b. « L'Hôte », condensé de l'œuvre », in Edouardo Castillo ed., *Pourquoi Camus?*, Paris : Philippe Rey, pp. 48-54
- 2017a. *Le Premier home, d'après l'œuvre d'Albert Camus*, Paris: Gallimard
- 2017b. *Entre mes deux rives*, Paris: Mercure de France
- & Attia, Maurice 2012. *Alger la Noire*, Bruxelles: Casterman
- Hirsch, Marianne 2012. *The Generation of Postmemory: Writing and Visual Culture After the Holocaust*, New York: Columbia University Press
- Kara-Ahmed, Ahmed [監修] 1984, *Villes d'Algérie au XIXe siècle, Estampes*, Paris: Centre culturel algérien-Paris
- Kateb, Kamel 2014. « Le bilan démographique de la conquête de l'Algérie (1830-1880) », in Abderrahmane Bouchène *et al.*, *Histoire de l'Algérie à la période coloniale*, Paris : La Découverte, pp.82-88
- Matsuura, Yusuke 2007. "The Historical formation of "Pieds-Noirs": Collective identity of repatriates from Algeria to France," *Acculturation dans les époques d'internationalisation*, pp.45-54. < <http://hdl.handle.net/2298/3213> > (2018年12月15日最終確認)
- McKinney, Mark 2001. "‘Tout cela, je ne voulais pas le laisser perdre’ : colonial lieu de mémoire in the comic books of Jacques Ferrandez," *Modern & Contemporary France*, 9(1), pp.43-53.
- Mimouni, Rachid 1989. *L'Honneur de la tribu*, Paris : Robert Laffont (邦訳、ラシード・ミムニ『部族の誇り』下境真由美、水声社、2018年)
- & Ferrandez, Jacques 1993. *Colline visitée, La Casbah d'Alger*, Strasbourg: Editions DS
- Nonnenmacher, Hartmut 2008. « La (re-)construction de l'histoire de « l'Algérie française » dans la série de B. D. Les Carnets d'Orients de Jacques Ferrandez », E. Arend *et al.* (éds.), *Histoires inventées*, Peter Lang, pp.101-126
- Still, Edward 2017. "Broken Fantasias? Jacques Ferrandez and chimeric quest for disillusionment," *Studies in Travel Writing* 21(3), pp.293-312
- Stora, Benjamin 2003. « 1999-2003, les accélérations de la mémoire », *Hommes et migrations* 1244, pp.83-95
- アスマン, アライダ 2007. 『想起の空間——文化的記憶の形態と変遷』安川晴基訳、水声社、(原著 2006年 [第3版、親本 1996年])
- 足立綾 2008. 「現代フランスにおける「ピエ・ノワール」——その生成とそれが目指すものに関する一試論」、『白山人類学』11号、pp.27-49

- 2012. 「ピエ・ノワールを名乗るとのこと——過去の共有を求めて」、石川真作ほか編『周縁から照射する EU 社会』、世界思想社、pp.63-86
- 2016. 「ラパトリエとピエ・ノワール——〈アルジェリアのフランス人〉の本国への帰還」、『文化人類学』80 巻 4 号、pp.569-591
- 足立綾・渋谷努 2012. 「第Ⅱ部 フランスにおける移民・マイノリティとシティズンシップ Introduction」、石川真作ほか編『周縁から照射する EU 社会』、世界思想社、pp.48-62
- 大嶋えり子 2014. 「記憶の承認を考える——フランスにおけるアルジェリア関連の記憶を中心に」『早稲田政治公法研究』106 号、pp.9-21
- 2016. 「フランスにおけるアルジェリアに関わる「記憶関連法」——記憶と国民的統合を巡って」、『国際政治』（日本国際政治学会）184 号、pp.103-116
- 2017. 『フランスにおけるアルジェリアの記憶の公的承認——1990 年代以降の移民統合および国民的結合を促進する政策の観点から』、早稲田大学（大学院 政治学研究科）提出博士（政治学）学位論文
- 工藤晶人 2013. 『地中海帝国の片影——フランス領アルジェリアの 19 世紀』、東京大学出版会
- 高山直也 2006. 「フランスの植民地支配を肯定する法律とその第 4 条第 2 項の廃止について」、『外国の立法』229 号、pp.92-113
- 平野千果子 2002. 『フランス植民地主義の歴史——奴隷制度廃止から植民地帝国の崩壊まで』、人文書院
- 2014. 『フランス植民地主義と歴史認識』、岩波書店
- 松浦雄介 2006. 「フランスの植民地引揚者たち——アルジェリアの場合」、『アジア遊学』85 号、pp.182-186
- 2009. 「ピエ・ノワールとは誰か——フランスの植民地引揚者のアイデンティティ形成」、蘭信三編『中国残留日本人という経験——「満州」と日本を問い続けて』、勉誠出版、pp.568-593
- 松沼美穂 2012. 『植民地の〈フランス人〉——第三共和政期の国籍・市民権・参政権』、法政大学出版局
- 2013. 「脱植民地化と国民の境界——アルジェリアからの引揚者に対するフランスの受け入れ政策」、『ヨーロッパ研究』（東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター）12 号、pp.129-141

*本研究は JSPS 科研費 26370423 の助成を受けたものです。